

FLORA KANAGAWA

Sep. 16. 2020 No.89

神奈川県植物誌調査会ニュース第 89 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp



図1. マメスゲ 2019年4月25日撮影 勝山輝男撮影.

箱根仙石原でマメスゲを再発見

(勝山輝男)

はじめに

マメスゲ *Carex pudica* Honda は神奈川県では1992年に箱根仙石原湿原周辺の樹林内で発見され、勝山（1993, Flora Kanagawa (35): 381）で神奈川県新産として報告された。その場所は1994年頃に別荘の造成で失われ（勝山, 2001 神奈川県植物誌 2001）、『神 RDB95』、『神 RDB06』ともに絶

滅と判断された。

2019年に箱根仙石原湿原モニタリングの活動が再開し、2019年4月25日より、月に1～2回、仙石原湿原を歩き、湿原の植物の生育状況や開花結実状況を記録することになった。その第1回の調査（4月25日）の際に湿生花園から湿原に入っすぐの、湿原復元実験区の南西側に隣接する湿生林内に多数のマメスゲが生育しているのを発見した。クサスゲと混生して生育しており、個

体数は50株程度はあるものと推定された。また、5月23日には実験区の南東側に隣接する湿生林内にも生育しているのが見いだされ、あわせると100株以上が生育すると推定された。これまでも仙石原湿原はよく調査されていたが、マメスグは5月の連休を過ぎた頃には、葉が茂り、有花茎が根元に隠れてしまい、マメスグを知っている者でないと発見しにくくなってしまったため、気付かなかったものと思われる。

2020年に特別保護地区内での採集許可を取得し、標本を採取することができたので、その標本を以下引用して報告する。

標本：箱根町仙石原 仙石原湿原 2020.5.14 勝山輝男 KPM-NA0221846.

カヤツリグサ科の外来種3種

(勝山輝男)

『神奈川県植物誌 2018』には間に合わなかった神奈川県新産のカヤツリグサ科外来種3種を同定したので報告する。

1. クルマバヒメグ *Cyperus aromaticus* (Ridl.) Mattf. & Kük.; *Kyllinga polyphylla* Willd. ex Kunth

2016年に保土ヶ谷区で不完全な標本が採集されていた。長い葉状の苞葉が6~8枚あることから、旧世界の熱帯に広く分布するクルマバヒメグ *Cyperus aromaticus* (Ridl.) Mattf. & Kük. と思われる。日本では1999年に千葉県船橋市でスリランカ製の椰子殻「ココピート」が使われたところに一時的に発生したものが報告されている(木村ほか, 2007)。そのほか、県外では福井県敦賀市(2012.11.9 渡辺定道 no.55944 KPM-NA0211103)で採集されている。標本：保土ヶ谷区峰岡 2016.9.6 吉川アサ子 KPM-NA0216313.

2. コモチビャッコイ (新称) *Isolepis prolifera* (Rottb.) R.Br.

2000年に綾瀬市の湿った空地で採集されていたが、当時はまったく見当がつかなかった。この1年間、外国産のカヤツリグサ科の未同定標本を一念発起して整理してきたが、その際に Champion *et al.* (2012) のページをめくっていたところ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドに分布する *Isolepis prolifera* (Rottb.) R.Br. が綾瀬市の植物に似ていることに気付いた。そこで、Musha & Simpson (2002) やwebサイト(New South Wales Flora Online および New Zealand Plant Conservation Network) で調べたところ本種で間違いなさそう



図1. コモチビャッコイ *Isolepis prolifera* (KPM-NA0120239) 左：シート全体 右：花序の拡大

である。2001 年以降、現地ではその後の確認がなく、一時的な侵入であったと考えられる。和名をコモチビャッコイと新称し、綾瀬市産の標本に基づいた形態を記録しておく。ビャッコイ属 *Isolepis* R.Br. は東～南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドを中心に世界に 69 種があり (Musha & Simpson, 2002)、日本にはビャッコイ *Isolepis crassiuscula* Hook.f. 1 種のみがある。

1 年草または短命な多年草。叢生し、高さ 10 ～ 40 cm。茎は円柱形で径 1 ～ 3 mm。基部に 1 個の無葉身で筒状の鞘があり、鞘部は赤褐色を帯び、先はやや膨らみ斜めに切れる。花序は頂生またはやや仮側生で数個～10 数個の小穂を頭状に密集し、総苞は花序よりも短い。しばしば花序から芽生して子株ができる。小穂は狭長楕円形で長さ 4 ～ 8 mm、幅 1.5 ～ 2 mm。鱗片は卵形で先は尖り、長さ約 2 mm、幅約 1mm、褐色の斑点がある。刺針状花被片はなく、雄しべは 3 個、果実は楕円形で偏 3 稜形、花柱は細長く、先は 3 岐。未熟果 (熟した果実は見えない) は黄白色で長さ 1mm 弱。

標本：綾瀬市深谷 2000.11.8 秋山守 KPM-NA0120239, KPM-NA0120240 (図 1)。

3. ナンカイカブスゲ (新称) *Carex flagellifera* Colenso

2017 年に鎌倉市で採集された密に叢生する不明スゲ属植物で、『神奈川県植物誌 2018』では取り上げる余裕がなかった。前出の *Isolepis prolifera* の検討に際して Champion *et al.* (2012) を見ていたところ、雌花穂の基部に少数の雄花部があることなど、*Carex dissita* Sol. ex Boott に似ていると感じた。しかし、*Carex dissita* は柱頭が 3 岐するので、柱頭が 2 岐する鎌倉の植物とは異なる。そこで、ニュージーランドのスゲ属植物にあたりをつけ、New Zealand Plant Conservation Network を調べた所、*Carex flagellifera* Colenso によく一致することが判明した。観賞用に栽培されることもあるらしく、カレックスの名でネット販売されている。周辺の人家で栽培されていたものから種子繁殖した可能性がある。和名をナンカイカブスゲと新称し、採集された標本に基づく形態を記録しておく。

密に叢生し、高さ 20 ～ 40 cm。基部の鞘は葉身が短く黒褐色。葉身線形で硬く幅 1 ～ 2 mm、縁には上向きの刺毛があり強くざらつく。有花茎は直立し、細く、平滑。頂花穂は雄性または上部に短く雌花部があり、長さ 2 ～ 3 cm、幅約 2 mm。側花穂は 3 ～ 4 個、雌性で基部に細く短い雄花部があり、直



図 2. ナンカイカブスゲ *Carex flagellifera* (KPM-NA0217066) 左：シート全体 右：側花穂の拡大

立, 長さ 1.5 ~ 3 cm, 幅 4 ~ 5 mm, 下方のものには長い柄がある。苞葉は有鞘, 下方のものは花序と同高の葉身がある。雄鱗片は卵形で長さ 3 ~ 4 mm, 鋭頭または微突端, 淡褐色。雌鱗片は広卵形, 果胞と同長で長さ約 3 mm。果胞は楕円形, 緑褐色で光沢があり, 長さ 2.2 ~ 2.5 mm, 幅約 1.5 mm, 短嘴で先は鋭 2 齒。果実は楕円形で黄白色, 断面はレンズ形, 長さ約 15 mm, 幅 11 ~ 12 mm。柱頭は 2 岐。標本: 鎌倉市佐助 2 丁目 2017.5.12 中山博子 KPM-NA0217066 (図 2)。

引用文献

木村陽子・大場達之・須賀はる子, 2007. 船橋市に一時帰化したクルマバヒメグサ, ヒメナンヨウガヤツリ, ナガミイッスンガヤツリ (新

称). 千葉県植物誌資料 (23): 207-210.

Muasha A. M. & D. A. Simpson, 2002. A monograph of the Genus *Isolepis* R.Br. Kew Bulletin 57: 257-362.

New South Wales Flora Online. <http://plantnet.rbg.syd.nsw.gov.au> (accessed on 2020.3.29).

New Zealand Plant Conservation Network. <http://www.nzpcn.org.nz/default.aspx> (accessed on 2020.3.29).

Paul Champion, Trevor James, Ian Popay & Kerry Ford, 2012. An illustrated guide to common grasses, sedges and rushes of New Zealand. 182pp. New Zealand Plant Protection Society.

エイザンスミレとトウカイスミレの推定雑種

(山本絢子・馬場しのぶ・大西 亘)

「神奈川県植物誌 2018」で触れられていない県内の特徴的なスミレ属の雑種について報告する。

著者の山本と馬場はエイザンスミレ *Viola eizanensis* (Makino) Makino に関係すると思われるスミレの雑種について, 2012 年から 2019 年までの数年間, 箱根町にあるブナ林の同じ場所で毎年数個体の生育を確認してきた (図 1)。この雑種個体群 (以下「本雑種」) は, 新井二郎氏 (元東京都高尾自然科学博物館) が発見され, 山本が新井氏からいただいた情報をもとに継続観察してきたものである。本雑種の周辺には, エイザンスミレとトウカイスミレ *V. tokaiensis* Sugim., nom. nud. とが多数混生していた。トウカイスミレは従来ヒメミヤマスミレの東海型と

されていた分類群で, 県内では箱根のブナ帯にのみ分布する。近年では独立した分類群として取り扱われることが一般的だが, 正式な記載はされていない。また, 本雑種の少し離れた周囲にはナガバノスミレサイシン, シコクスミレ, マルバスミレ, フモトスミレの生育が見られた。

本雑種はエイザンスミレの雑種に特徴的な, 荒い鋸歯のある分裂葉を持つ。エイザンスミレと他のスミレ類との間に生ずる雑種として知られているもののうち, このような特徴をもつものとして, フジミヤマスミレ *V. × fujisanensis* S. Watan. (エイザン×シコク), ワカミヤマスミレ *V. eizanensis* Makino × *V. keiskei* Miq. (エイザン×マルバ), スルガキクバスミレ *V. × eizasieboldii* Sugim. ex T. Shimizu (エイザン×フモト), オクタマスミレ *V. × savatieri* Makino. (エイザン×ヒナ) が挙げられる (いがり 1997, 浜



図 1. エイザンスミレとトウカイスミレの推定雑種。左: 2012 年 4 月 25 日。左端の個体はトウカイスミレ。右: 2013 年 4 月 21 日。上部左と中央左端はトウカイスミレ。(いずれも 足柄下郡箱根町 山本絢子撮影)。

2002, 渡邊 2005). このうち、シコクスミレの関係するフジミヤマスミレは、本雑種と類似する部分もあるが、渡邊 (2005) の写真を参照すると、花茎が立ち上がり葉と離れた高さに花が位置する点で本雑種と異なるように思われる。マルバスミレの関係するワカミヤマスミレは鋸歯の先端が鋭い点で本雑種と異なる。またフモトスミレの関係するスルガキクバスミレは、葉が披針形に近く、裏面が紅紫色を帯びる点で本雑種と異なる。オクタマスミレは本雑種に類似するが、上昇が強く反り返らない点、葉が先端に向けてより長く伸びる点、葉の鋸歯がやや鋭い点から本雑種とは区別できるように思われる。また、オクタマスミレの関係するヒナスミレは箱根山中に広く分布するが、本雑種の観察地周辺では生育を確認できなかった。これらの他に本雑種の周辺に生育していたスミレ類では、ナガバノスミレサイシンがあり、その交雑に由来する可能性もあるが、本雑種は葉と花の形態の特徴からナガバノスミレサイシンに由来するものとは考えにくい。

以上のことから、本雑種は既知のエイザンスミレと他分類群の関係する雑種ではなく、ごく近傍に混生するトウカイスミレとエイザンスミレの交雑に由来する可能性が高いものと考え、ここに報告する。

生育の情報を提供いただき、報告についてご快諾下さった新井二郎氏に感謝申し上げます。

引用文献

- いがりまさし (1997) 日本のスミレ。山と溪谷社、東京。
- 浜栄助 (2002) 増補原色日本のスミレ。誠文堂新光社、東京。
- 渡邊定元 (2005) エイザンスミレとシコクスミレの雑種。植物研究雑誌 . 80: 121
- 神奈川県植物誌調査会 (2018) 神奈川県植物誌 2018, 神奈川県植物誌調査会, 小田原。

ホシケチドメグサは 2 通りの種子散布機会を持つ

(大西 亘・植物誌調査会藤沢グループ)

ホシケチドメグサ (ホシゲチドメグサ)

Bowlesia incana Ruiz. et Pav. は、2009 年 3 月 31 日に大庭遊水地で発見され、新帰化植物として報告された (勝山 2010, FK69:835-836)。当初、発見地付近にのみ気づかれていたが、この 10 年間に周辺地域でも生育が確認されるようになり、現在までに確認された生育地は藤沢市内で 5 か所となっ

た (図 1)。植物誌調査会藤沢グループ (以下「藤沢グループ」) が市内を網羅的に観察した 10 年間の生育状況の記録から、ホシケチドメグサは、親個体周辺での緩やかな分布拡大に貢献する単距離散布と、新たな生育集団を生じさせる 2-4 km 程度の中距離散布の 2 通りの種子散布機会を持つ可能性が示された。

現在確認された藤沢市内のホシケチドメグサの生育地は、(1) 大庭、(2) 湘南台駅西側、(3) 葛原、(4) 長後、(5) 辻堂海浜公園のおおまかに 5 つの集団として認識できる。いずれの集団の間も最短で 2 km ほどの距離がある (図 1)。

(1) 大庭

大庭一帯では、最初の発見地の大庭遊水地と周辺地域でさらにいくつかの生育地のまとまりを確認できる。大庭遊水地では、2009 年 3 月 31 日から 2011 年 2 月まで継続的に観察された。なお、この間遊水地には、2010 年 12 月 3 日に隣接する引地川から河川水が越流し、ホシケチドメグサの生育していた辺りを含めて冠水している。その後、発見地へ入るのが不可能となり、以降の生育は確認できていない。次に大庭でホシケチドメグサが発見された場所は、2011 年 1 月に大庭遊水地の生育地より北西側へ 2 km ほど離れた住宅地の歩道で、イヌツゲの植栽の下に約 250 m ほどにわたって繁茂していた。この場所一帯では以降継続的に生育が見られ、当初見られなかった坂道の下にも生育地が広がっているものの、2019 年には株数は数えるほどになった。大庭で 3 番目に発見された生育地は、大庭遊水地の生育地より西に 1.5 km ほどの住宅地の歩道植栽下で、2011 年 5 月にわずかな個体が発見された。2012 年 2 月には道をはさんだ反対側の歩道にも見つかった。この一帯での広がりには 2019 年までにあまりなく、5 月末～6 月初めに枯れ、11～12 月に発芽し、開花している状況が観察された。

(2) 湘南台駅西側

湘南台駅の西側に位置する引地川に沿った住宅地は、大庭遊水地の生育地より 4 km ほど引地川を遡った一帯で、歩道・街路樹枠内などで繁茂している。当初は 2012 年 4 月に引地川左岸の住宅地で見つかった。2018 年以降には駅西口や引地川左岸のさらに上流側を含む一帯で見られるようになった。また、2014 年には引地川右岸側でも発見され、2019 年以降には右岸内陸側の上流一帯でも繁茂している状況にある。

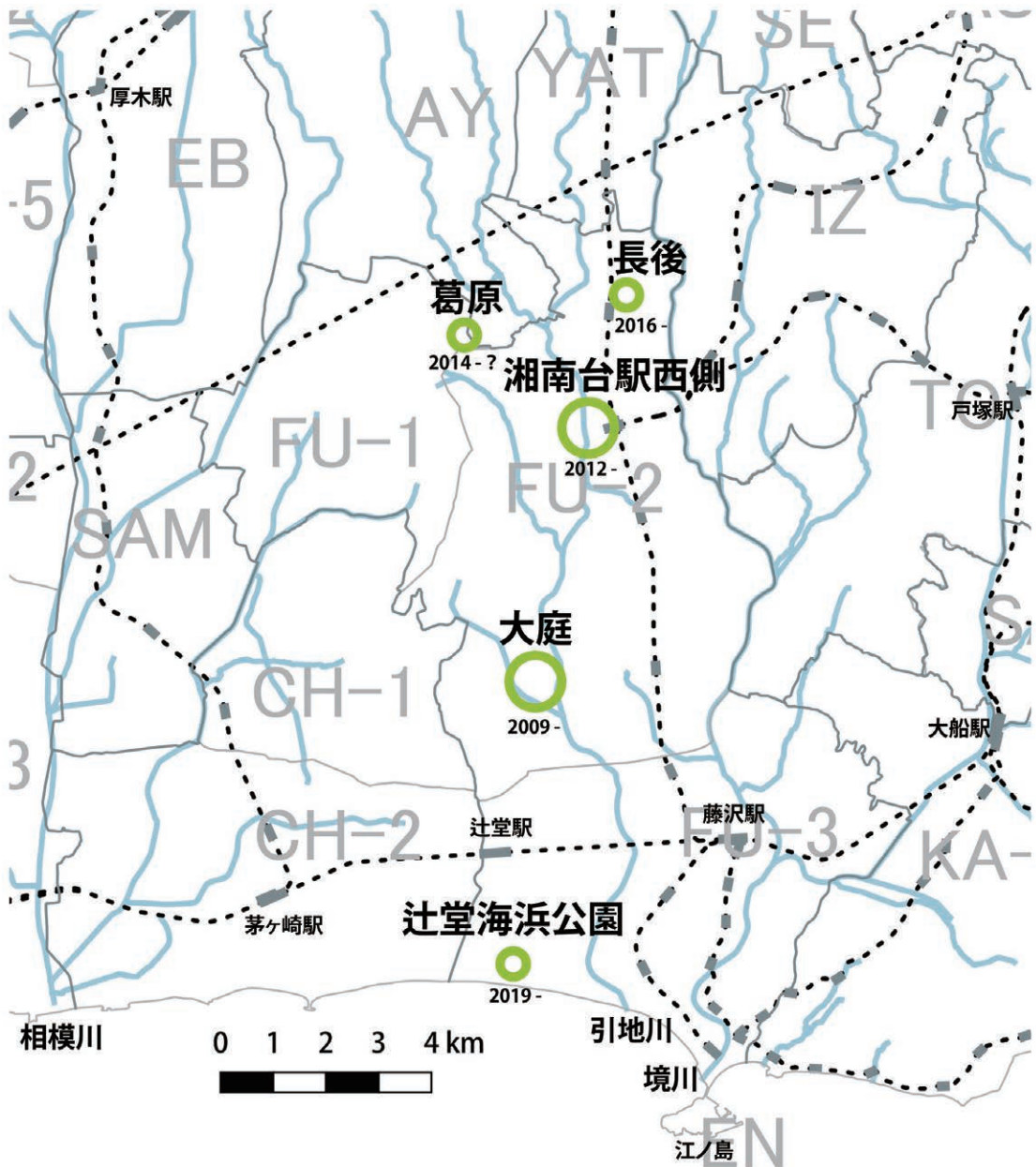


図 1. 2020 年 4 月現在までに確認されたホシケチドメグサの生育地。緑の円は生育地内の記録地をおおよそ含むように大きさを決めた。緑の下の数字はそれぞれの生育地での初発見年を示す。地図中背景の濃いグレーの実線は自治体境界、薄いグレーの実線と文字は『神奈川県植物誌調査』における各調査区、水色は河川、破線は鉄路を示す。基盤地図情報ならびに国土数値情報を利用し、著者が地図を作成した。

(3) 葛原

綾瀬市境に近い葛原では、2014 年 4 月にごく小規模な集団が見つかった。この生育地は最も近い湘南台駅西側の生育地より北西に 2 km ほど離れた内陸に位置する。その後 2017 年 5 月までは確認されているが、以降は調査・再確認がなされていない。

(4) 長後

長後駅北東側の県道 457 号線近くで 2016 年 1

月に初めて確認された。湘南台駅の北、約 2.5 km ほどの場所である。2020 年には付近の遊歩道でも確認された。

(5) 辻堂海浜公園

公園内の砂防林フェンス近くで 2019 年 3 月に 1 株が確認された。大庭遊水地より南に 4.2 km ほど離れた場所である。2020 年にも現存が確認された。

ホシケチドメグサの発見から現在に至る約 10

年間には、藤沢市自然環境実態調査（2011-2013 年）や『神奈川県植物誌 2018』の調査（2013-2016 年）が実施され、藤沢グループのメンバーは継続して藤沢市一帯の網羅的な植物相調査にかかわってきた。そのため、記録された 5 つの集団以外の場所では、ホシケチドメグサの生育がないか、発見できない程度に極めて低密度に生育する状況にあるものと考えられる。このことから、ホシケチドメグサは（a）親個体周辺での緩やかな生育地拡大をもたらす散布（b）低頻度に生ずる 2-4 km 程度の中距離散布の異なる 2 つの様式の種子散布機会を持つものと考えられる。ただし、この 2 つの種子散布機会の違いがどのような仕組みでもたらされるのかは不明である。親個体周辺への散布は重力散布を主としたものと考えられるが、中距離散布の可能性としては、園芸植物や土に随伴した人為的な移動による場合と、風散布、水流散布、付着散布が挙げられる。ホシケチドメグサでは風散布機構が確認できず、風散布が主たる散布機会となっている可能性は低そうである。また、頻繁に冠水するような水辺に多く生育するものではないので、水流散布も主たる散布機会にはならなそうだが、当初大庭遊水地内で発見されたことから、水流によって散布されることが低頻度ながらあるのかもしれない。一方、ホシケチドメグサの記録地は主に路傍や街路樹枠内であることから、園芸植物や土に随伴した非意図的な人為的な移動や、ヒトや散歩のイヌへの付着散布は、ホシケチドメグサの中距離散布の機会としてより可能性がありそうである。

これまでに確認されたホシケチドメグサの生育地は、県内では藤沢市内に限られているが（佐々木, 2018）、国内では 2012 年頃に和歌山県和歌山市（稗田, 2014）、また 2020 年に東京都心部（大手町～東日本橋、岩槻, 2020）でもそれぞれ記録されている。報告されている生育状況からは、ホシケチドメグサは主に歩道や街路樹枠内、公園敷地など、人工的な環境下に広がりを見せており、より人為的な攪乱の少ない環境への進出は限定的なようである。また、生育地の広がりや速度の点でも、現時点では侵略性や在来植物への影響が懸念されるものではなさそうである。しかし、藤沢市においては、局所的な集団の衰退も観察されているものの、全体としては市域に広く生育地が拡大した事実があり、今後も県内のホシケチドメグサの生育状況を注意深く観察していきたい。

本報告は、藤沢グループの浅野牧子さんより大

西宛に 2020 年 4 月に届いた、藤沢グループによる丹念な観察レポートを元に加筆して構成したものである。大西は報告の構成を担当し、藤沢グループは全ての観察とレポートのまとめ、報告内容の確認を担当した。

引用文献

- 勝山輝男（2010）セリ科の新帰化植物ホシケチドメグサ。FK69:835-836.
- 稗田真也（2014）和歌山市のホシケチドメグサ？。近畿植物同好会掲示板, <https://9315.teacup.com/sinkinshoku/bbs/276>（2020/7/27 閲覧）
- 佐々木シゲ子（2018）ホシケチドメグサ。神奈川県植物誌調査会編、神奈川県植物誌 2018 電子版, 1697-1698.
- 岩槻秀明（2020）歩いたら、まさかの大発見☆。わびちゃんのメモ帳オフィシャルブログ, <https://ameblo.jp/wapichan-official/entry-12581213755.html>（2020/7/27 閲覧）。

10 年後の神奈川県立境川遊水地公園の花ごよみ調査

（佐々木シゲ子・和田良子・野津信子）

『県植誌 2018』の調査に合わせ 2017 年 4 月から 2 年間花ごよみ調査をしたので報告する。前回は 2008 年から 2 年間の花ごよみ調査の結果を佐々木ほか（2011a）として報告し、新産種等の詳細を佐々木ほか（2011b）に報告した。その後は春と秋を中心に年数回の調査を続けてきた。

調査員：佐々木シゲ子・和田良子・野津信子

調査場所：神奈川県立境川遊水地公園 下飯田遊水地（神奈川県横浜市泉区）

調査地は境川の洪水被害を軽減するために造成された遊水地で、境川を挟んで横浜市側の俣野遊水地、下飯田遊水地と藤沢市側の今田遊水地からなる。前回の調査は戸塚区の俣野遊水地と泉区の下飯田遊水地の 2 か所を調査したが、今回は下飯田遊水地のみで行った。

調査期間：2017 年 4 月から 2019 年 3 月までの 2 年間、真夏と真冬を除き、原則月 1 回、15 回行った。

記録方法：毎回観察できた植物名とその植物の開花状況を記録した（△：つぼみ、○：開花、×：実、※：イネ科、イグサ科、カヤツリグサ科）。

結果と考察：調査期間中の観察記録種は計 294 種であった。

科	合計	下飯田遊水地（2017～）				県植誌2018	前回下飯田	県植誌2001
		在来種	帰化種	園芸種	帰化率%	帰化率%	帰化率%	帰化率%
イネ科 (タケ亜科を除く)	39	21	17	1	44.7%	54.0%	30.4%	47.5%
カヤツリグサ科	24	22	2		8.3%	10.9%	10.0%	8.1%
マメ科	20	10	10		50.0%	57.5%	54.2%	47.4%
タデ科	12	9	3		25.0%	29.2%	31.3%	28.6%
アブラナ科	13	5	7	1	58.3%	66.3%	71.4%	67.5%
キク科	35	9	26		74.3%	47.7%	71.7%	46.6%
その他の科	151	82	66	3	44.6%	-	-	-
全体	294	158	131	5	45.3%	34.9%	47.1%	30.1%

表 1. 下飯田遊水地公園 花ごよみ調査観察種および帰化率の比較.

帰化率の算出は園芸種を除いて行った. 県植誌 2018, 県植誌 2001 の帰化率はそれぞれの植物誌に記録された植物の種類数により, 算出した.

佐々木 (2011b) で報告した新産種やレッドデータ植物のうちで, 今回確認できた主な種は, 以下の通りである. ヒメコウガイゼキショウ (イグサ科, 『神 RDB06』 絶滅危惧 I A 類, 広範囲に広がりが見られた), タコノアシ (タコノアシ科, 『国 RDB19』 準絶滅危惧), コバナキジムシロ (バラ科), オオタチヤナギ (ヤナギ科, 高木のものが見れ, 低木も含め本数はふえている. 図 1), ミズキンバイ (アカバナ科, 『国 RDB19』 絶滅危惧 II 類, 『神 RDB06』 絶滅危惧 I B 類, 現地では保護され増えている), オオカワヂシャ (オオバコ科, 溝沿いにかなり増えている), ミゾコウジュ (シソ科, 『国 RDB19』 準絶滅危惧種).

今回確認されなかった種はチャボタイゲキ (トウダイグサ科), マルバフウロ (フウロソウ科) ハマナデシコ (ナデシコ科), ヒメイワダレソウ (クマツヅラ科) である.

今回新たに確認された種はシロバナシナガワハギ (マメ科), ヒシ (ミソハギ科), メリケムグラ (ア

カネ科), ヤマトアオダモ (モクセイ科), ヤセウツボ (ハマウツボ科), ホナガカワヂシャ (オオバコ科), ウチワゼニクサ (ウコギ科) などである.

横浜新産種としては, ニワゼキショウ白花種でセッカニワゼキショウ (アヤメ科, 植村ほか 2010 日本帰化植物図鑑 2:387, 図 2) があつた. 前回の調査では 368 種, 今回は前回種数から約 2 割も減少していた.

2017 年からの下飯田遊水地調査, 『県植誌 2018』, 前回の下飯田遊水地調査, 『県植誌 2001』 における主要な科ごとの帰化率を表 1 にまとめた. 全体の帰化率を見てみると, 『県植誌 2001』 では 27.0 %, 『県植誌 2018』 では 32.0 % と増加傾向にある. 下飯田遊水地でのそれは前回で 47.1 %, 今回では 44.6 % と若干の減少がみられた.

遊水地内で確認種数の多い, イネ科, カヤツリグサ科, マメ科, タデ科, アブラナ科, キク科の科別の帰化率を見てみた. キク科の帰化率は 74 % と突



図 1. オオタチヤナギ雄株 (2020 年 3 月 13 日 佐々木シゲ子撮影).



図 2. 多目的グラウンドの法面に広がるセッカニワゼキショウ (2020 年 5 月 13 日 佐々木シゲ子撮影).

出しており、これは前回とほぼ変わらない（前回 71.7 %）。県内のキク科の帰化率は『県植誌 2001』で 46.6 %、『県植誌 2018』では 47.7 % であった。イネ科では前回の 30.4 % から 44.7 % にふえていた。そのほかのマメ科、タデ科、アブラナ科では前回の調査より下がっている。『県植誌 2018』の帰化率と比べると、キク科以外の上記の科ではすべて低かった。

確認された種は 2 回ともキク科、イネ科が多かった。園芸種（逸出種）は前回はスイカ、ミニトマトなど 18 種あったが、今回はコメ、ダイコンなど 5 種であった。

遊水地は河川からの洪水被害を軽減するために作られたものである。年数回の水害によるかく乱があり、県内のほかの地域より帰化率は高いのではと考えられた。2 回の調査とも、予想通り県全体の帰化率より高かったが、それはキク科のみに突出していた。

種数の減少については、前回は遊水地公園への改修工事から 1 年後の調査であり工事による地面のかく乱があり、植物数も多かったが、約 10 年後の今回の調査では、経年による環境の安定や、木々の成長や本数の増加もあり、新しい草本類の入りこむ余地が減ったことによるとみられる。

おわりに

ほぼ 10 年後の調査であった。調査していても、前回との変化が十分感じられ、中でも越流堤内のヤナギの成長が早く、数も増えている（図 3）。県内では泉区のみで確認されているオオタチヤナギも高木になった。増水時の流入ゴミが枝の上部にかかっているのも目にする。FK 72 号の表紙の写真のような、越流堤のカラシナ（アブラナ科）の景色は見られなくなり、現在では、3 月半ばを過ぎると多数のまだ低木のヤナギに花がみられ、季節が進み次第に



図 3. 下飯田遊水地の越流堤（2020 年 5 月 13 日 佐々木シゲ子撮影）。

人の丈ほどに伸びた状態のカラシナ、ナバガバギシギシ（タデ科）、オニウシノケグサ（イネ科）、ナヨクサフシ（マメ科）などが地面を覆うようになる。草刈は原則年 1 回とのことで、今後高木になりつつあるヤナギなどの木々の管理も必要になると思われる。今後も経過観察を続けていきたい。今回の花暦調査の調査リストおよび報告書は、前回同様県立境川遊水地公園に提出した。

謝辞

県立境川遊水地公園の福留晴子副園長には、毎回の調査時に同行いただき、大変お世話になりました。この場をお借りし感謝いたします。

引用文献

- 神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001.1580pp. 神奈川県生命の星・地球博物館, 小田原.
- 神奈川県植物誌調査会編, 2018. 神奈川県植物誌 2018.1720pp. 神奈川県生命の星・地球博物館, 小田原.
- 佐々木シゲ子・野津信子・埜村恵美子・和田良子, 2011a. 神奈川県立遊水地公園の花ごよみ調査. Flora Kanagawa (72): 867-870.
- 佐々木シゲ子・野津信子・埜村恵美子・和田良子, 2011b. 2009 年以降の横浜市内産の植物について. Flora Kanagawa (73): 878-880.
- 植村修二・勝山輝男・清水距宏・水田光男ほか, 2010. 日本帰化植物図鑑 2:387.

サイエンスミュージアムネットで公開されている神奈川県で採集された標本の同定変更

（田中徳久）

近年、「サイエンスミュージアムネット」(<http://science-net.kahaku.go.jp/>; 以下 S-Net と表記) により、日本国内の博物館等の標本データベースが公開され、各標本庫等での標本調査を実施する際に、標本の所蔵状況を知ることが可能になるなど、有用である。しかし、各標本庫等により、データベース化やその公開の状況は異なり、公開されているデータベースが、所蔵標本の全てでないことには、注意が必要である。また、大西 (2019) が報告しているように、ラベルに記載されている採集情報に誤りがある場合もあり（もちろんデータベースも登録間違いもある

と思われる), 標本庫における実地の標本調査も必要不可欠である。

2017年度から進めている科研費による研究(課題番号 17K01218), および神奈川県レッドリスト選定・評価の過程で, 県外の植物標本庫でも標本調査を実施し, レッドリスト選定に関連する標本を探索してきた。その結果, 別に報告予定の重要な標本を見出した一方, S-Net で興味深い標本のデータを見出したが, 実際の標本を確認したところ, 誤同定であったものもいくつかある。関係標本庫には, 連絡済であるが, インターネット上の情報が今後, どのように更新, 修正されていくか不明であるので, 以下に記録として残しておく。

弘前白神山地研究センター (SIHU)

S-Net では神奈川県産の標本 239 点のデータが公開されている。S-Net では採集者名は公開されていないが, このデータの多くは斎藤宗勝氏が採集したものであった。また, S-Net では現状未公開であるが, 弘前白神山地研究センター所蔵の神奈川県産の標本には, 1940 ~ 1960 年代に正宗厳敬, 水島正美, 細井幸兵衛らが採集した標本が含まれていた。神奈川県産のレッドデータ植物関連の標本としては, 牧野富太郎が 1916 年に横須賀で採集したハマビシ *Tribulus terrestris* L. (MAK70975 が採番) のほか, 丹沢のアオホオズキ *Physalisstrum japonicum* (Franch. & Sav.) Honda (SIHU3600), 大室山のウインタキソウ (SIHU4350), オオキヌタソウ *Rubia chinensis* Regel & Maack (SIHU3835) などが確認された。

以下に示したように, ノウルシとされていた標本がタカトウダイに, ヤマジノホトトギスとされていた標本がホトトギスに同定変更された。

ノウルシ *Euphorbia adenochlora* C.Morren et Decne. (トウダイグサ科)

S-Net には, MBK0149943 の 1 点があった。るが, 採集年月日が 1980 年 10 月 19 日であることのみが公開されている。標本調査以前には, 『神植誌 18』には, 1981 年に横浜市港北区で採集された標本 (KPM-NA1003674) が引用されているので, 「同じ頃に採集された標本か。なぜ弘前の標本庫に」という興味があった。実際, 標本を確認したところ, ラベルには「秦野市矢名」。「新産地か? いや, そんな環境があったか?」と思いつつも, どうも草姿がノウルシらしくない。葉に鋸歯がある, 果実は・・・などと検討し, ハタと思ひ至った。そもそも花(果実)のある標本なのに, 採集されたのは 10 月。これはおかしいと気づいたこともあるが, 形態からも

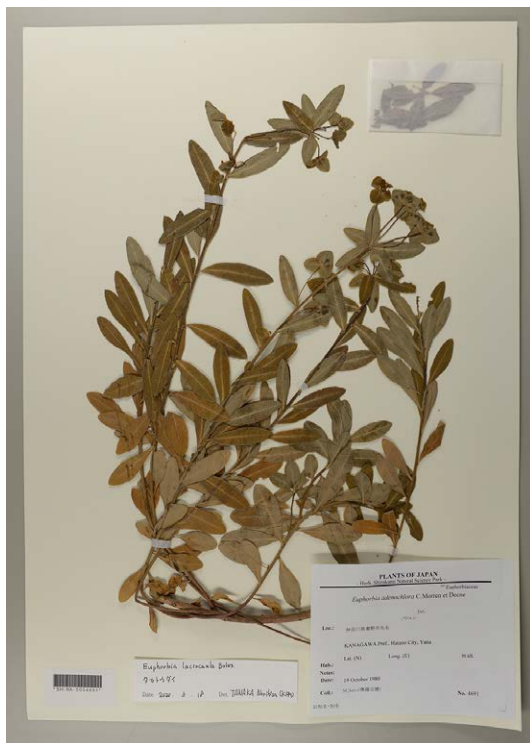


図 1. ノウルシとされていたタカトウダイの標本 (SIHU4691)。

タカトウダイと結論づけた。

ヤマジノホトトギス *Tricyrtis affinis* Makino (ユリ科)

S-Net には, 秦野市で採集された SIHU814 の 1 点がある。『神植誌 18』ではヤマジノホトトギスは, 県北の生藤山でのみ記録がある。ただ, 『神植誌 58』には「丘陵地及山地に稍普通」とあり(『神植誌 88』ではホトトギスに誤同定とされ県内にないとされた), 「証拠標本発見か」と考えた。しかし, 標本を確認したところ, 茎の毛は明らかに開出から上向きであり, ホトトギスの誤同定であった。

長野県環境保全研究所 (NAC)

S-Net では神奈川県産の標本 1,776 点のデータが公開されている。S-Net では採集者名は公開されていないが, このデータの多くは 1970 ~ 2000 年代に藤原陸氏が採集, あるいは藤原一絵氏が採集し藤原陸氏に送ったものであった。神奈川県産のレッドデータ植物関連の標本としては, 藤沢のハネガヤ (NAC-VU063556) や大村敏朗が 1957 年 11 月 17 日に奥湯河原で採集したミヤマササガヤ (NAC-VU140013) の標本などが確認された。前者は, 『神植誌 18』では, 県央の北部から県北で記録されており, 藤沢での分布は貴重である。後者は, 『神植誌 18』に, 同日, 同場所で西尾和子氏が採集した



図 2. ヤマジノホトギスとされていたホトギスの標本 (SIHU814)。



図 3. ナンカイイタチシダとされていたオオイタチシダ (あるいはベニオオイタチシダ) の標本 (NAC-VU066463)。

標本 (KPM-NA0000466) が引用されており、同行して採集したのであろうか。

以下に示したように、ナンカイイタチシダとされていた標本がオオイタチシダ (あるいはベニオオイタチシダ) に同定変更された。

ナンカイイタチシダ *Dryopteris varia* (L.) Kuntze (オシダ科)

S-Net には、NAC-VU066463 と NAC-VU066464 と 2 点があり、採集地は逗子市であった。標本調査以前には、『神植誌 18』には、大磯のみが記録されているので、「新産地か」と期待した。実際に標本を閲覧し、同定を試みたが、私の能力にはあまり、草姿や鱗片などの写真を撮影し、後に岡武利氏に同定をお願いした。その結果、「写真からでは…」と言われつつ、「オオイタチシダあるいはベニオオイタチシダでは」と同定いただいた。少なくとも私の同定より、信頼はおけるというか、絶大な信頼を寄せ、少なくともナンカイイタチシダでない、と判断した。なお、本報告の文責は著者の田中にあり、岡氏には責任がないことを付記しておく。

富山市科学博物館 (TOYA)

S-Net では神奈川県産の標本 492 点のデータが公

開されている。S-Net では採集者名は公開されていないが、このデータの多くは長井真隆氏が採集したものであった。また、神奈川県産のレッドデータ植物関連の標本としては、長井真隆氏が採集したもののほか、大森雄治氏が横須賀で採集したタチアママモ (TOYA31779) やハマツツナ (TOYA31817) などが確認された。

以下に示したように、オオバショリマとされていた標本がハクモウイノデに同定変更された。

オオバショリマ *Thelypteris quelpaertensis* (Christ) Ching (ヒメシダ科)

S-Net には、TOYA1859 と TOYA1859 と 2 点があり、採集地は札掛であった。『神植誌 18』には、参考種とされ、「丹沢山〜蛭ヶ岳〜原小屋の記録がある (丹沢目録 61)」とある上、「本州における分布は日本海側に偏る」とされ、札掛では標高も低いので「微妙かな」を思っていた。さて、実際に標本を閲覧し、同定を試みたが、前出の長野県環境保全研究所のナンカイイタチシダ同様、私の能力にはあまり、草姿や鱗片などの写真を撮影し、後に田村淳氏に同定をお願いした (ナンカイイタチシダよりは分かるかな、とは思ったのだが、やはり自信が持てなかった)。その結果、「ハクモウイノデ」と同定いただい



図 4. オオバショリマとされていたハクモウイノデの標本 (TOYA1859)。

た。言われてみれば、TOYA1859の標本ラベルには「カクモウイノデ」(ちょっと苦しいが「ハクモウイノデ」の書き間違い?)を消し、オオバショリマとされていた。なお、本報告の文責は著者の田中にあり、田村氏には責任はないことを付記しておく。

謝辞

標本調査でお世話になった弘前白神山地研究センターの山岸洋貴、長野県環境保全研究所の尾関雅章、富山市科学博物館の太田道人、坂井奈緒子、画像による標本同定をお願いした岡 武利、田村 淳の各氏に感謝の意を表す。なお、本報告の一部は、JSPS 科研費 JP17K01218 による成果の一部を含む。

引用文献

サイエンスミュージアムネット . <http://science-net.kahaku.go.jp/> (2020 年 2 月 21 日 確認)
大西 亘, 2019. 葉山のミヤマニガウリと採集記の重要性. *Flora Kanagawa*, (87): 1036-1037.

未登録標本の扱いは慎重に—横浜の植物相からサンシチソウを削除—

(田中徳久)

神奈川県サンシチソウは、本報告の著者である田中が、*Flora Kanagawa* の 48 号で、1997 年に横浜市栄区本郷台で野津信子氏が採集したことを報告したのが最初であると思われる。その後、『神植誌 01』や『神植誌 18』では、この田中 (1999) の報告を引用し、横浜市こども植物園の未登録標本として、そのまま引用されて来た。

現在、各ブロックへの『神植誌 18』の標本データベースのフィードバックの作業を進めており、その中で、『神植誌 18』の本文中で引用している標本データの『神植誌 18』の標本データベースの登録の有無などを確認している。また、『横浜の植物』(横浜植物会編, 2003) の補遺を編纂中であるが、これらの過程で、この未登録状態で引用されているサンシチソウのことが課題となった。篠原康之氏と佐々木シゲ子氏に横浜市こども植物園で標本を調査していただいたところ、当該標本は YCB410073 と YCB410065 の 2 点として存在したが、それぞれ 1997 年にノゲシに同定変更されていた。すなわち、『神植誌 01』の編集刊行時には、同定変更されていたことになる。

上記のように長い間、横浜市産のサンシチソウが生き残ってしまった原因は、未登録標本のままの情報を独り歩きさせてしまったことだと考えられる。『神植誌 01』の編集時にも、入稿間際になり、いくつかの未登録標本を追加し、分布図などを作成したが、その後、『神植誌 18』の編纂が始まってから、それらの未登録標本の登録状況を確認したところ、いくつかの不明標本があった。それを反省し、『神植誌 18』編纂時には、必ず登録した標本情報を利用するようにしていた(採集情報が抜けていても必ず標本番号は確保した)。しかし、引用標本の中に、未登録標本があるとは盲点であった。今後の教訓としたい。

『神植誌 01』では、ここで問題とした横浜産の標本のみが引用されていたが、『神植誌 18』では、その後、見出された 1953 年に秦野市平沢で採集された標本 (HCM045279) が引用されているので、サンシチソウが神奈川県の植物相から削除されることはないが、横浜市の植物相からは削除される。また、『神植誌 01』、『神植誌 18』にも修正が必要なので、特に報告しておく。

最後に、横浜市こども植物園で標本を調査してい



図 1. ノゲシに同定変更されたサンシチソウとして報告された標本 (YCB410065)。

ただいた篠原康之、佐々木シゲ子の両氏に感謝の意を表する。

引用文献

田中徳久, 1999. 『神奈川県植物誌 1988』で取り上げられていない帰化植物ほか (2). Flora Kanagawa, (48): 558-559.

40 年の時を超えてつながる思い 境川斜面緑地のアズマイチゲ

(秋山幸也)

決して広くはない神奈川県の中でも、生物の希少性というのは地域的に濃淡がある。県全体として見れば絶滅の危険が著しく高いというわけではないが、都市部に近い緑地に細々と残ったという相対的な価値が高く、それをとりまく地元の人たちからすると極めて希少性の高い植物というものがある。

相模原市と町田市の都県境を流れる境川沿いの緑地のアズマイチゲ *Anemone raddeana* Regel は、まさしくそんな位置づけの植物だ。少し古い引用になるが、FROLA KANAGAWA No.17 の表紙を飾る記事(諏訪 1984) に、写真と共に紹介されている。



図 1. 上鶴間高校生物部 OB と境川斜面緑地を守る会のみなさん (2020.2.29)。

まだコロナ禍が外出自粛の徹底に及ぶ少し前の 2020 年 2 月、このアズマイチゲを最初に見つけた当時の高校生たちと、今そこを保全管理する市民とが 40 年の時を超えて交流する機会が得られたので、その経過を報告したい。

第一発見者を知らせる電話

相模原市立博物館へかかってきた電話の主は、第一発見者の従兄弟にあたる F さんという方だった。境川のアズマイチゲと言えば、1990 年代から特定非営利活動法人境川の斜面緑地を守る会 (以下、守る会) が保全活動の中心として管理している場所のシンボリックな植物であるが、1970 年代終わりにはすでに発見されていたとのことで、まずその点に驚いた。さらに発見者は当時の県立上鶴間高校生物部の生徒だと言う。

F さんのお話は続く。発見者である笠倉正道氏(諏訪 (1984) で笠原氏とあるのは誤記)は当時開校間もない上鶴間高校生物部の一期生で、大学へ進学したものの直後に病魔におそわれ、夭逝されたとのこと。そして、できれば故人の思いを、現在保全活動をされている方へお伝えしたいということだった。それならばということで、守る会の設立メンバーで、当会会員でもある太田浄子さんへ連絡したところ、すぐに動いて下さった。

F さんと、さらには当時の上鶴間高校生物部顧問の吉田修久先生とつながり、発見の経緯や、標本が吉田先生と笠倉氏らの連名で提出されたこと、生物部の OB たちがその後も定期的に集まりを持ち、何人かの方はその後も現場をそと訪れていたことなどがわかった。そして、2020 年 2 月 29 日、いつもの年よりもだいぶ早めに咲き出したアズマイチゲが咲き乱れる境川斜面緑地で、当時の高校生と守る会のメンバーが対面したのである。そのときの記念写



図2 上：アズマイチゲ群落。下：アズマイチゲ。(いずれも1980年代初頭。相模原市南区上鶴間。撮影：吉田修久氏)。

真を見ると、初対面の若干の緊張と、それを上回る感慨深げな表情が印象的である(図1)。そして、当時吉田先生によって撮影されたアズマイチゲの写真もお借りすることができた(図2)。

見守る人それぞれの思い

そういえば、15年近く前にこんなことがあった。太田さんたちが、当時はヤブの隅で風前の灯火だったアズマイチゲの保全のため、自生する一画をテープで囲った。さらに、太田さんと私で相談し、保全していることを明確にするために「調査実施中 相模原市立博物館」という看板を掲げた。すると間もなく博物館へ電話があり「細々と見守ってきた貴重な自生地なのに、そんなことをしたらかえって目立

ち、盗掘の危険が高まってしまうのではないか」という御意見を頂戴した。それがいわゆるクレームというような悪い印象ではなく、冷静で真摯な語り口だったため、むしろ「他にも見ていた人がいたんだ」という驚きを感じたことを覚えている。

それが実は生物部OBのお一人で、2月に集まった中に電話主がいらしなのである。私の方は忘れかけていたその一件を自ら告白、しきりに恐縮されていた。しかし私はむしろ、40年にわたり亡き友人の思いを引き受けて見守ってこられたことに対し、深い感銘を受けた。

標本が時をつなぐ

この件については、太田さんが相模原植物調査会 NEWSLETTER No.248 (2020年4月号)に別の角度から書いて下さっている。その中には、太田さんが1998年に現場で行っていた水質調査の折にアズマイチゲを見つけたこと、その前の1997年5月には高橋秀男氏から情報を得て、当会会員だった近藤肇氏と境川沿いを探したものの、季節が遅くアズマイチゲは見つからなかったことなどが記されている。高橋氏、近藤氏、そして FROLA KANAGAWA (17)に記事を書かれた諏訪哲夫氏もすでに鬼籍に入り、笠倉氏による発見から太田さんの再発見の間をつなぐ状況を確認することはできない。しかし、重要なことは、そこを見守る市民の強い思いがかるうじてつながったという事実である。

かつて新設高校生物部の生徒が新しい活動場所を求めて周辺を探索し、アズマイチゲを発見し標本に残したこと。それが顧問の先生によって博物館へ託されたこと。その記録をもとに注目していた諏訪氏や高橋氏から、守る会の市民活動へバトンが渡されたこと。Fさんから電話を受けた時には「偶然にも」ストーリーがつながるかも、という気持ちでいたのだが、関係者のお話が出そろってくるにつれ、それは思い違いだとわかった。標本に残すという生物学の基本を忠実に守って下さったことが、地域の植物を守りたいという思いをつなげる生命線となって現在に至る、必然の結果だったのである。

標本を残すということの重要性もさることながら、希少な植物の保全に果たす地元の人々の思いがいかに大切か、改めて感じられたので、少し長めの報告をさせていただいた。電話によって貴重な情報を下さったFさん、保全の現場を主導してくださっている太田浄子さん、生物部OBに集合をかけてくださり、貴重な写真をご提供いただいた吉田修久先生に改めて感謝の意を表します。

- 横浜植物誌：出口長男 秀英出版 (1968)
- 神奈川県植物誌 1988：神奈川県植物誌調査会 神奈川県博物館 (1988)
- 神奈川県植物誌 2001：神奈川県植物誌調査会 神奈川県立生命の星・地球博物館 (2001)
- 横浜の植物：横浜植物会 (2003)
- 神奈川県植物誌 2018：神奈川県植物誌調査会 (2018)

3. 神奈川県植物誌 2018 への横浜ブロックの取り組み

以下の内容を記載したパネルを展示しました。
「2013 年 3 月 9 日横浜市こども植物園で、植物誌調査会横浜ブロック第 1 回総会が高橋秀男先生を会長として発足し、以来 2018 年までに横浜植物会の協力のもとに次の努力により、横浜市内において 14,702 点の標本を採集し、横浜市こども植物園や神奈川県立生命の星博物館をはじめ県内に所在している各博物館に納入した。この結果 2001 年～ 2018 年横浜市内採集標本は 18,622 点になった。」

- ① 横浜市 18 区を 30 人の会員がそれぞれ担当区を決めて標本を採集した。
- ② 担当以外でも数多くの方々が、標本を採集し納入していただいた。
- ③ 横浜市こども植物園標本館を事務局とし 4 人の事務局員を決めた。
- ④ 同定は高橋秀男会長、林辰雄先生、長谷川義人先生にお願いした。
- ⑤ 年に数回、採集が遅れている区などで採集会を開催した。
- ⑥ 月に 2・3 回作業日を設け、同定、ラベル作成、標本貼付、標本番号付与、データ入力、配架等の作業を行った (図 3)。
- ⑦ データのチェック・修正・集計及び小田原の神奈川県植物誌調査会本部へのデータ送付を横浜植



図 3 標本作業日の作業。

物会と協力して行った。

⑧ 事務局及び横浜植物会は、神奈川県植物誌 2018 の執筆者が横浜市こども植物園の標本を閲覧する際支援を行った。

4. 横浜ブロックの成果のまとめ

- ① 市内で生育する植物の種類 (科別) 【グラフ】
- ② 2018 年までに収蔵された標本からみた各区の分布植物の種類数 (科別) 【グラフ】
- ③ 横浜市内採集の年次別 (1945 以前～ 1976) 標本数 【グラフ】
- ④ 横浜市内採集の年次別 (1977～ 2018) 標本数 【グラフ】

5. 大都会の横浜市で残し守られている植物たち

以下をパネルに記載して展示しました。

【前文】

横浜市は面積 438km² に 373 万人の人口を擁した大都会です。特に戦後の高度成長期に森林や田畑を開発して工場や住宅等が建設され自然が失われ、公害が発生しはじめたため、市民、行政及び政治は豊かな自然を残し守らなければならないことに気付きました。

市民の要請に従って行政及び政治は、豊かな自然が維持されている森林・原野・田畑等を守るために、そのような地域を公園や市民の森に指定しました。また、市民は各地域で自然を守る会を結成しボランティアで様々な活動をし、行政や政治は必要な制度を作り予算の確保に努めています。

このような努力があつて、大都会とは思えないような自然、とくに貴重な植物たちが残され守られています。その代表的な植物たちを紹介します。

【腊葉標本と写真】

- ① イヌセンブリ (センブリ科) YCB435669
横浜市栄区自然観察の森 2013/9/19 高橋秀男
- ② ウメガサソウ (ツツジ科) YCB446937
横浜市都筑区大丸 2018/5/18 辻和男
- ③ ウラギク (キク科) YCB446370
横浜市金沢区長浜 2015/10/23 渡辺重彦
- ④ オオタチヤナギ (ヤナギ科) YCB429896
長野県三郷村 2004/5/15 高橋秀男
- ⑤ カザグルマ (キンポウゲ科) YCB428872
横浜市保土ヶ谷区川島町 2005/5/20 後藤昭子
- ⑥ クサレダマ (サクラソウ科) YCB442241
箱根町仙石原 2017/7/6 篠原康之
- ⑦ クジュウツリスゲ (カヤツリグサ科) YCB446875
横浜市旭区矢指町 2018/4/26 佐々木シゲ子・和田良子・野津信子



図5 カザグルマ。

⑧ スズサイコ（ガガイモ科）YCB434640

横浜市都筑区北山田 2013/7/15 辻和男

⑨ スハマソウ（キンポウゲ科）YCB436339

横浜市栄区上郷町 2014/3/13 鈴木照夫

おわりに

この報告は横浜植物会年報 49 号（2020）の「神奈川県植物誌と横浜植物会」展示会（渡辺重彦）から多くを引用しました。

横浜植物会は 2003 年に「横浜の植物」を刊行しましたが、『神奈川県植物誌 2018』での調査を反映した、「横浜の植物 2003 補遺編」を現在編集中です。

.....

企画展示「巡回展『神奈川県植物誌 2018』と三浦半島の植物たち」

（横須賀市自然・人文博物館 山本 薫）

展示期間 2019 年 12 月 7 日（土）～ 2020 年 2 月 16 日（日）

関連行事 展示解説 12 月 7 日（土）、2 月 8 日（土）
延べ 57 人

入場者数 延べ 11,375 人

横須賀市自然・人文博物館では、神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、県博）の特別展示「植物誌をつくろう！～『神奈川県植物誌 2018』のできるまでとこれから～」の一部を巡回展として迎え入れ、当館が三浦ブロックをはじめとした調査会会員の皆様と調査・収集した資料とともに、上記のとおり展示をおこないました。

展示構成は県博に準じ、「1 章 植物誌とは？」、「2 章 神奈川県植物調査史」、「3 章『神奈川県植物

誌 2018』のできるまで」、「4 章『神奈川県植物誌 2018』でわかったこと」、「5 章『神奈川県植物誌』のこれから」とし、それぞれのコーナーにおいて「三浦ブロックらしさ」や「当館らしさ」を演出しました。「1 章 植物誌とは？」では、これまでに刊行された『神奈川県植物誌』のほか、三浦半島地域に関連した他都市の植物誌を展示、紹介しました。「2 章 神奈川県植物調査史」では、当館所蔵の文献資料（江戸時代の資料や横須賀製鉄所資料、牧野富太郎関連の資料など）を展示し、歴史分野の充実を図りました。「3 章『神奈川県植物誌 2018』のできるまで」および「4 章『神奈川県植物誌 2018』でわかったこと」では、三浦ブロックの活動の紹介、三浦半島でのみ確認された植物や三浦半島地域に特徴的な植物について、標本と植物誌の該当ページを展示しました。「5 章『神奈川県植物誌』のこれから」では、既存のパネルに加え、植物標本を利用した共同研究の成果を紹介しました（県博や当館の標本も解析されています）。



図1 展示室の様子。ウォールケース内は「4 章『神奈川県植物誌 2018』でわかったこと」を展示。

展示に用いた標本と文献およびパネルの一部は当館所蔵・制作、県博からはパネル 25 点、植物レプリカ 4 点（帰化植物：シンテッポウユリ、マツバウンラン、ウラジロチチコグサ、ナガミヒナゲシ）と「杉田のスギ」1 点をお借りしました。レプリカは来場者の目を惹き、「最近よく見かけるようになって、ずっと気になっていた」、「今回の展示で名前（種名）を知ることができてよかった」等の声をいただきました。また、「杉田のスギ」の借用にあたっては、当館としてもあまり例がない大型資料の運搬となりました。運搬業者の探索、運搬経路の確保、運搬にかかる費用や人のコスト

等、大変な面もありましたが、現在の「杉田」の地名を知る来場者（京急線沿線に位置する当館利用者の多くは「杉田駅」でお馴染み）に大きなインパクトを与えることができました。



図2 杉田のスギ。

本展示は「子ども」を対象にした内容ではなかったものの、三浦半島でみられる植物（今回は海岸植物）を素材とした「植物パズル」（県博での展示にあった「植物パズル」の要素を取り入れました）と「植物ぬりえ」といった子ども向けコンテンツを用意しました。大人が展示を見ている間に子どもがパズルで遊ぶといった光景も見られ、多くの世代の方に植物に親しんでもらうことができました。また、展示の随所にペリー画像と吹き出しをつけて解説にコメントをつけたリ、展示会場内にBGM（鳥の声や水の流れ等）を流したりする等、展示室内が柔らかい雰囲気になるよう工夫しました。

展示の関連行事として実施した展示解説では、三浦ブロックの会員にも登場いただき、採集方法や標本作成のエピソードをお話ししていただきま



図3 「植物パズル」。



図4 「植物ぬりえ」。

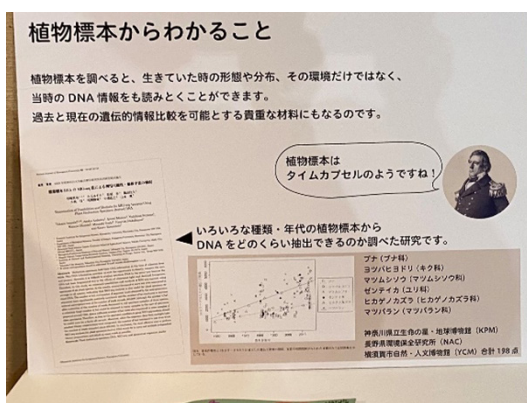


図5 ペリー画像と吹き出しのコメント。

した。質疑応答も盛り上がり、来場者と会員の間に思いがけず交流が生まれ、嬉しく思いました。

本展示は約1年前から構想し、途中7か月間は産休・育休により不在となる期間もはさみましたが、当館主催行事「第3回みんなの理科フェスティバル」※（2019年12月14・15日）の関連行事として位置付け、検討をすすめました。同じく「みんなの理科フェスティバル」の関連企画として開



図6 展示解説の様子。

催した「自然環境講演会」(横須賀市自然環境共生課との共催)では、テーマを「よこすかの植物たち」とし、「世界に残された植物標本が語るもの」(県博 大西亘学芸員)と「DNA から探る横須賀・三浦地域の植物の由来」(神奈川大学 岩崎貴也博士)の講演をいただきました。講演会来場者の反響は大きく、企画展示にもある植物標本の重要性や博物館の意義を知り、三浦半島地域の植物への理解を深める機会となりました。



図7 講演会において登壇する大西学芸員。

※「みんなの理科フェスティバル」は、小中学生から大人まで、様々な年齢層の団体や個人による科学的探究活動(≒「理科」)の成果を一堂に会し、所属のみならず世代を超えた「交流の場」と、小中学生の理科の先にある「理系キャリア教育の機会」を提供する事業です。小中学生の自由研究や理科工作、高校生以上の個人や団体の研究発表、講演会、ワークショップ等を内包する事業として2017年から展開しています(県博の大西学芸員には第1回から発表者として参加いただいております。押し花作品づくりのワークショップには調査会会員の金子龍次氏の協力をいただきました)。



図8 「第3回 みんなの理科フェスティバル」のちらし。本展示の広報もした。

本展示および関連行事を通して、調査会の皆様の活動の成果を広く発信し、多くの方に身近な植物や自然に関心をもっていただくことができたと感じております。神奈川県立生命の星・地球博物館、神奈川県植物誌調査会の皆様に感謝申し上げます。

また、当館の内船俊樹学芸員(昆虫学担当)には、展示の構想についての助言ならびに関連行事等との調整を図っていただいたほか、後述の巡回展第2部の発案、実施にもご協力いただきました。当館の藤井明広学芸員(文献史学担当)と飯島和歌子氏(図書担当職員)には当館所蔵の文献資料の選出および展示作成にご協力いただきました。

本展示開催に際し、借用した資料の運搬等にあっては、全国科学博物館振興財団の助成(内船俊樹:「地域文化の核を目指す「みんなの理科フェスティバル」の連携拡大に向けた取り組み」)などを利用しました。

さいごに

当館の事情により、2020年3月14日～5月31日に企画されていた展示の内容変更が迫られたことから、急遽、巡回展の第2部として企画展示「ヨコスケンセ ～よこすかの歴史を彩る植物たち～」を開催することとなりました。これは、本草学の流れをくむ江戸時代の植物研究から西洋の植物研究を取り入れていった過程、さらに現在の『神奈川県植物誌』編纂に至るまで、横須賀や神奈川県内で多くの植物調査がなされてきたことを紹介する展示です。前述の展示の中の「2章 神奈川県の植物調査史」制作時に、日本の植物調査史において、横須賀をはじめ神奈川県内における植物調査史の存在感が大きいと感じたことが第2部の着想につながりました。この展示の内容については次号以降にお知らせしたいと思います。なお、この巡回展第2部は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により2020年6月2日～9月27日と開催期間を変更して展示をしています。

今後の『神奈川県植物誌2018』関連展示の予定

(事務局)

『神奈川県植物誌2018』と当会の活動を紹介する展示は本年度も予定されています。現在予定されているものとして、横浜ブロックの篠原さん、

目 次

勝山輝男：箱根仙石原でマメスゲを再発見	1059
勝山輝男：カヤツリグサ科の外来種 3 種	1060
山本絢子・馬場しのぶ・大西 亘：エイザンスミレとトウカイスミレの推定雑種	1062
大西 亘・藤沢グループ：ホシケチドメグサは 2 通りの種子散布機会を持つ	1063
佐々木シゲ子・和田良子・野津信子：10 年後の神奈川県立境川遊水地公園の花ごよみ調査	1065
田中徳久：サイエンスミュージアムネットで公開されている神奈川県で採集された標本の同定変更	1067
田中徳久：未登録標本の扱いは慎重に—横浜の植物相からサンシチソウを削除—	1070
秋山幸也：40 年の時を超えてつながる思い 境川斜面緑地のアズマイチゲ	1071
事務局：『神奈川県植物誌 2018』関連展示の開催報告	1073
横浜ブロック 篠原康之：神奈川県植物誌と横浜植物会	1073
横須賀市自然・人文博物館 山本 薫：企画展示「巡回展『神奈川県植物誌 2018』と三浦半島の植物たち」	1075
事務局：今後の『神奈川県植物誌 2018』関連展示の予定	1077
編集後記	1078

相模原市立博物館の秋山幸也さんより以下の情報が届きました。感染防止対策の上、ぜひお出掛けください。

横浜市こども植物園横浜植物会協力展示会

「横浜植物会の歴史と横浜の植物 2019」

会期：令和 2 年 9 月 1 日（火）～9 月 27 日（日）

（休園日 9 月 23 日（水））

会場：横浜市こども植物園展示室

横浜市南区六ツ川 3-122

TEL: 045-741-1015

相模原市立博物館企画展

「神奈川の植物、相模原の植物 植物誌から考える生物多様性」

会期：令和 2 年 9 月 19 日（土）～11 月 15 日（日）

会場：相模原市立博物館 特別展示室

相模原市中央区高根 3-1-15

TEL: 042-750-8030

休館日：毎週月曜日（9 月 21 日は開館）、

9 月 23 日、11 月 4 日

観覧無料

記念講演会「科学の眼で植物誌を読み解く」

※ オンライン配信（予定）

「生物多様性と地域植物誌」新田梢さん（麻布大学特任助教）

「APG 分類体系と植物の進化」倉田薫子さん（横

浜国立大学准教授）

大会議室での講演会を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンライン配信で行うことになりました。配信期間や受信方法等について、9 月 19 日以降、相模原市立博物館のホームページ等でお知らせします。ぜひご覧下さい。

※開館時間等については、横浜こども植物園、相模原市立博物館まで直接お問い合わせ下さい。

編集後記

今号は 7 月頃の発刊の予定が、担当の都合により 9 月に伸びてしまいました。早々に原稿をお寄せ下さっていた執筆者のみなさま、到着を心待ちにされていた会員のみなさま、申し訳ありませんでした。コロナ禍における今年度の役員会・総会・会の運営の対応については、同封の資料をご確認下さい。（大西 亘）

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館内

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp

郵便振替 00230-5-10195

加入者名 神奈川県植物誌調査会

年会費 2,000 円